
新たなる錬鉄の英雄の物語

真紅の外套

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新たなる錬鉄の英雄の物語

【Nコード】

N6857I

【作者名】

真紅の外套

【あらすじ】

錬鉄の英雄はただ独り、しかし新たな英雄の誕生が物語の歯車を回す。

新たなる聖杯戦争が今此処に開幕する。

終わりと始まりの物語（前書き）

初めまして真紅の外套です。今回は初めて筆をとらせていただき
ました。

至らない部分も多いかもしれませんが長い目で見てください。

終わりと始まりの物語

ある騎士の話をしよう、自身の理想に傷つき摩耗していった騎士の話……

彼の始まりは無限の赤だった、一面の炎に充滿した死の香り、助ける求める声

に晒されながら地獄を歩き続けた。

彼はすべてを失い、力尽きた……だがそんな地獄で彼を助けた人がいた、

その人の笑顔に憧れた。

時が経ち、彼を救った人は彼に理想を笑顔とともに託しこの世から

去った……

『正義の味方』という理想を受け継いだとき彼は本当に自身の名を

得たのだろう、衛宮士郎という名を。

再び時が経ち、彼は運命の夜に出会う。

全てを叶える願望機、聖杯を巡るサーヴァントと呼ばれる人の世に名を残す

英雄達の戦いに巻き込まれてゆく、彼自身もサーヴァントを召喚し自らの

理想を叶える為に戦い抜いていった。

そして悪夢のような戦いが終わり、彼と彼を支えてくれた少女の

別れの時が訪れる。

黄金の夜明け、彼女は彼に言葉を紡ぎ二人は永遠に別れる事

となる。

それから数年後、彼は自身の理想を叶える為に歩み始めた。しかし彼に待っていたのは非情な現実だった、彼がどんなに頑張っても

救えないものがある、それはある意味当然の事だった、普通の人間ならば

到底耐えられるものではない

だが彼はそれでも先へと進んだ、自身がどんなに傷つき折れかけても・・

ある時自分では何をしても救えない存在が現れる、彼は本来救えない筈の

存在を世界と契約することによって救う。

『我が死後を預ける、その報酬を今此処に貰いたい。』

そんな彼の最期は救いを与えた者による裏切りだった。

そして彼はあの丘に辿りつく。衛宮士郎は世界の奴隷となりこの世から去った・・・

剣、剣、剣、剣、剣、見渡す限り一面に剣が刺さっている。
此処に辿りつける存在は本来一人しかいない、にもかかわ
らず此処に

辿りついた存在が現れた。
限りなく衛宮士郎に近く、限りなく遠い存在が。

『ふう、私も遂に此処に来ちゃったか、まああの時から覚悟
はとっくに決めて

ただけどね。さて、私は世界あなたの奴隷になる訳だけど
こちらからも条件を指定させて貰うわよ』

『私の死後を預ける、だから……………』

終わりと始まりの物語（後書き）

真紅の外套です。どうでしたか？気にかけてもらえれば幸いです。

最後に出て来たキャラについては正体が解るのはかなり後なので楽しみにしてください。

初めての作品なので是非感想をください。

動き出す運命（前書き）

お久しぶりです。最近、中々時間が取れなくて遅くなりました。拙い文ですが読んでやってください。

動き出す運命

今から10年前、日本のある土地で一つの戦争が起こった。

その戦争の名は聖杯戦争、全ての願いを叶える願望機、聖杯を巡って七人の魔術師^{マスター}が聖杯によって呼び出された英霊を自身の使い魔として戦う戦争である。

呼び出された英霊はサーヴァントと呼ばれ、主に7つの役割を^{クラス}与えられる。

セイバー 全サーヴァント中、最優とされる剣の騎士。

アーチャー 遠距離戦を得意とする弓兵。

ランサー 全サーヴァント中、最速の槍兵。

ライダー ありとあらゆる物を乗りこなす騎乗兵。

キャスター 数々の魔術の秘奥を扱う魔術師

バーサーカー 目に入る存在全てを破壊する戦いに狂った狂人。

アサシン 気配遮断や暗殺を得意とする暗殺者。

ごく稀にこれ以外のイレギュラークラスが召喚されることもある。

今回の戦争は、冬木市に住むある少女がサーヴァントを召喚するところから始まる。

• 新たなる英雄の誕生によって、再び運命の歯車を回しながら……

『素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバイ
ンオーグ 降り立つ風には壁を。』

四方の門は閉じ、王冠より出て、王国に至る三叉路は循環せよ』

『閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返す』

つどに五度。ただ、満たされる刻を破却する』

『—————^アnfang』

『—————告げる』

『—————告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖
杯の寄るべに従い、』

この意、この理に従うならば応えよ』

『誓いを此処に。我は常世総ての善となる者。我は常世総ての悪を』

敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ
—————!」

「この手ごたえ、間違いなく最強のカードを引当てたわ……つて?」

おかしい、目の前の魔法陣にいる筈のサーヴァントがいない?

その瞬間、居間のほうでもものすごい轟音がした。そうまるで何かが落下したような。

「はい……? 私のサーヴァントは? つつ上か!」

(く、私ってどうしてこういう肝心な時にポカやらかすのだろう) そう思いつつ全力で地下室を飛び出し全力で階段を駆け上がっている。

「つつ、確か居間から落下音が聞こえた筈、あれ? 開かない? 扉、壊れてる!?!」

叩いてもひっぱても押ししてもうんともすんとも言わない……ああもう(怒)

「邪魔だ!」

どごとんと轟音立てて扉が蹴られ吹き飛ばす。

「……またやつちゃった。」

そして私の目に入ってきたのは、居間が所々破壊されている中で偉そうにソファァァァでふんぞり返ってる赤い外套を着た騎士だった。

『やれやれ、私もまたとんでもないマスターに召喚されたものだ。』

『……それで、アンタ、何？』

『……はあ、全くそれが初対面の者に対してかける言葉かね？』

『そう嫌味つたらしい口調でこちらに聞いてくる赤い外套奴しかも、やれやれこれは貧乏くじを引いたかな。』とかこっちに聞こえるように呟いている。

『ふん、まあいいわ、確認するけどあなたが私のサーヴァントで間違いないわよね？』

『ふむ、まず私が君のサーヴァントか？と言う質問に対してだが、答えはyesだ。自身をよく見てみたまえ私との間に契約をした証のパスが繋がっているのがわからないかね？』

『つつ！』そう言われてあわてて自己の中を探る、確かに自分の魔力が目の前の男にながれていくのがわかる。

『全くそれでも聖杯を求めるマスターかね？そういったことは一番最初に確認すべきだと私はおもっただが。』

『ああ、それとこちらからも質問だが、何故私は空中で召喚され、なおかつ落下したのだ？ 私もここまで乱暴な召喚は初めてでね、混乱している。』

『私だって、サーヴァントの召喚は初めてよ。だからそういう質問は却下。それともなに？私は生まれたての赤ん坊です、一から全て教えてくださいますか？』

やられてばかりは癪に障るので嫌味ったらしく言い返してやった。

『む、ならば私のマスターである証を見せてもらおうか。』

きつと私が何も知らない未熟者だと思っただけで聞いてきたのだからうけど、生憎私は証について知っている。

『これよ、サーヴァントを使役するマスターとしての証、令呪。』
そう言っただけで右腕に出た令呪を見せつける。

『どう？納得だった？これを見てもまだ何か文句言っつもの？』

『……はあ、まいったな。本気かね？』

不満げに顔を曇らせながら言った。

『な、何でよ？』

『まったく、そんな形だけの私のマスターとでもいうつもりかね？ただサーヴァントを律するだけの道具で。君が私のマスターなのはわかっていて、私が見たかったのは、君が忠誠を尽くすに足る人物かどうかだったのだが。』

『……っつ。』

『そ、それはそうだけどマスターの証って言ったら普通令呪の事だと思っじゃない。』

『なに？それであなただけがマスター失格とでも言う気？』

『いや、君との間にパスがある以上君は私のマスターだ。しかし、戦闘では私の指示に従ってもらおうと私の邪魔をしないのが条件だ。』

『

『……………』
『あー、まずい押さえが効かない。』

『なんなら君は、ずっとこの屋敷にこもっていただけってかまわないぞ。』

『つつ、もうあったまきたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

『い、いつたいなにを？』

『……………
『トAnfang』』

『令呪に告げるVertrag……!』

強力な魔力の渦が巻く

『さて、やめろ、こんなことに令呪を使うのか、やめろ 遠坂!』

『え……………?』

アイツからの思いがけない一言に気が逸れ、令呪の使用が無効になった。

『アンタ……………今なんて?』

『む?私はやめろと言っただけだが、貴重な令呪を消費するところだったのだからな。』

(私の気のせい?)

『ふむ、君の性質はだいたい理解したマスター。ひとつ訂正しようマスター、君は最高の魔術師だ。魔力といい思い切りの良さとい

い経験が少ないのが少々気になるがたいしたハンデにならん。君の技量を見抜けず、戦いから遠ざけようとした私が過ちだった。無礼ともども謝ろう。』

居を正して、礼儀正しく頭を下げる。

『えー！、ちょっと、まって、たしかに色々言っちゃただけど私にも悪いところがあるし……。』

『そうか、いや、話の解るマスターで助かった。なにか切り返しはやいわねコイツ。』

『それでアンタの役割は^{クラス}』

『ふむ、見て解らないかね？』

『アンタ、セイバーじゃないの？』

『生憎剣は持っていないくてね。』

『ドジったあれだけ宝石使っておいてセイバーじゃないなんて目も当たられない。』

するとアイツは何かむっとした様子で。

『ああどうせアーチャーでは派手さに欠けるだろうよ。いいだろう、その暴言後で悔やませてやる。』

その時に泣いて許しを請うなよマスター。』

そんなアイツの反応が以外で。

『ええ、楽しみに待ってるわ。』

笑顔とともに返事を返した。

『あ、アーチャー最初の仕事なんだけど』

『む、早速か敵はどこに・・・』

『はい、これとこれ。』

そう言っつて塵とりとほうきを渡す。

『なに?』

『あんたが壊したんだから責任もって直しといてね。』

『おい、マスター君はサーヴァントをいっただい何だと。』

『え、使い魔でしょ? ちょっと維持と扱いに困る。』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『それじゃ後よろしく私は寝るから。』

『おい、マスター。』

『あれ、さっき言ったこと忘れたの?』

『ぐ。』

『それじゃ、よろしくね。』

『・・・・・・・・・・了解した。地獄に落ちろマスター。』

そうして彼女が部屋に戻ると。

『やれやれ、まさか聖杯戦争にサーヴァントとして召喚されるとはな。ありえないと思いつながらこの時を待っていたが……』

動き出す運命（後書き）

どうでしたか？ まだまだ彼女は出ません。進行が遅いですが、ゆっくりつきやっつけてください。お願いします。

感想などをぜひ入れてください書く励みになります。それではまたの機会に。

英雄との出会い（前書き）

皆さんお久しぶりです。やっと投稿できました。

今回はやっとタグにあるキャラを出せました、タグで来た人は楽しみにしてください。

英雄との出会い

赤、赤、赤、見渡す限り一面に真紅の炎、充滿する死の香り。

崩れ朽ちた建物、そして悲鳴、助けを求める声。

助けて、助けて、助けて。

お願い、助けて、助けて、私を助けて、もう嫌だ、痛い嫌だ。

悲鳴と炎が埋め尽くす中、一步、一步、歩いて行った。

助けを求める声を聞きながらも、それを聞かないようにして歩いた、歩き続けた。

ああ、これは十年前の時なんだと理解する。

そして、あの時と同じように幼き自分は倒れ、力尽きる。

そして出口の無い闇に身をまかせようとした瞬間、そこにあつた地獄が、ある一つの景色につぶされた。

剣、剣、剣、それは、剣がなければ存在出来ない世界。

どこか見覚えのある世界、しかしそんな世界にまるで人の血を吸ったような　　が降っていた。

それは本来あり得ない現象。

そんな世界に、　　彼女は居た。

『シロウ……』

『……………』

最悪な気分が目覚める。

まるであの地獄を再び体験してきたような気分の悪さ。

『………起きるか。』

そう言って立ち上がり、寝起きの頭を冬独自の冷たい冷気で頭を冷やす。

目が覚めてくると、さっきの夢を思い出す。

（それにしても最後のはいったい何だったんだろっ？十年前には見なかった景色、見たことない筈なのに何所か懐かしく、そしてあの場にいた少女。）
そう思案している。

『あれ、先輩起きちゃったんですか？』

と土蔵の扉が開いて一人の少女が姿を見せる。

『おはよう桜、すまん寝過した。』

『おはようございませす。先輩、今日は随分と遅かったんですね。』

『うわ、もうこんな時間か、急いで飯作らないと。』

『あ、大丈夫ですよ、朝ご飯は出来てます。』

『そうか、すまん桜だけにやらせてしまった。』

『いえ、大丈夫ですよ。あ、でも欲を言えばもうちょっと寝てて欲しかった・・・』

『ん、なにか言ったか？桜？』

『いえ、なんでもありません。』

なんだか異様にあわてている。

『????』

『先輩、それよりも朝ごはんにしましょう！藤村先生が首を長くして待ってますよ。』

とあわてながら逃げるように去って行った。

『どうしたんだ？桜の奴？』

内心疑問に思いながらも服を着替え、顔を洗って食卓につく。

『しーろーろーうーうーお腹すいた、起きるの遅い。お姉ちゃんもうお腹ぺこぺこだよ。』

そう言っ切嗣て食卓で叫んでいるのは、冬木の虎こと藤村大河である。早くに親父を亡くした俺にとっては保護者みたいなものである。

『すまん藤ねえ、寝坊した。』

そう言いながら食卓につく

『もう、土郎ったら起きるの遅いんだから。』

『藤村先生、先輩はいつも頑張ってるですから今日ぐらい寝坊したっていいじゃないですか。』

と朝食の準備しながら桜が弁護してくれる。

『むー、まあ桜ちゃんがそういっただったらしょうがないな。それじゃ士郎も来たところだしご飯食べよっか。』

『そういって食事が始まる。』

『先輩、どうぞ。』

と桜が茶碗を差し出してくる。

『ああ、ありがとう桜』

茶碗を受け取り食事を開始する。

『うーん。やっぱり桜ちゃんのご飯は最高だよ。』

『そういいながら神速の速度で食卓にのっっているおかずを消費していく。』

これが衛宮邸の朝の風景である。

そんな食事が終わり、桜と藤ねえは、弓道部の朝練と顧問なので俺より先に行ってもらった。

俺はというと朝ごはん関連を全て桜に押しつけてしまったので、皿洗いをしてこれから出かける所だ。

『これでよし。』

鍵をかけて学校へと登校する。

通路路の半ばまで来た時、視界に一人の少女が映った。

『あれは・・・遠坂か？』

遠坂凜。容姿端麗、成績優秀といわれる正真正銘の優等生だ。

普段ならあまり気にしないのだが、今朝はなにか様子が違った。

『誰かと話してる？だけど周りには誰もいないけどな？』

次の瞬間ものすごい頭痛に襲われ思わず膝をついた。

『ぐっ・・・』

その瞬間、昨日の帰り道で出会った銀の髪の少女のことが頭に浮かんだ。

『早く呼び出さないと死んじゃうよ、お兄ちゃん』

『っつ。何だったんだいまのは。』

イメージが薄れ、ようやく立てるようになった時はすでに遠坂の姿は道から消えていた。

多少ふらつきながら学校に着くと何かほんのわずかな違和感があった。

『なんだ・・・？』

それについて思案していると、予鈴が鳴った、

『まずい。』

全力で走ってなんとか藤ねえの到着前に教室に辿りついた。

『ふむ、今日は遅かったな衛宮。』

と親友の一成が声をかけてくる。

『いや、まあ色々あってな。』

と会話をしていると。

『みんな、おっはよー、今日も元気にHRやるわよー。』
元気な藤ねえの声が聞こえてきた。

これがごく普通の我がクラスの日常だったりする。

それから放課後になり一成に頼まれた仕事をしていると。

『しまった、すっかり遅くなっちまったな。これじゃ後で藤ねえに何言われるか・・・』

次の瞬間、校庭の方から何か鉄のぶつかりあう音が聞こえた。

『音？誰か居るのか？』

いぶかしながらも校庭に歩みを向けていくと・・・

『—————な』

そこで意識が完全に凍りついた。

戦っている。赤い男は二対の双剣を持ち、青い男は真紅の槍を持って、まるで昔の神話のような光景が目の前で繰り広げられていた。

わからない、思考が現実を追いつかない。

ただ見た瞬間に理解した。あれは人間であるはずがない、人間を遙かに超えた存在であるという事を。

遠く離れていても伝わってくる殺気、尋常ではない魔力が籠っているのがわかる。

本来なら今すぐ逃げださなければならぬ、だというのに目の前で繰り広げられる剣戟に俺はすっかり目を奪われていた。

青い男が手にした朱槍で神速の突きを見せ、赤い男は手にした双剣でそれを捌く、青い男の槍捌きもすごいが俺は赤い男が振るう双剣の剣舞になぜか引き寄せられていった。

『—————』

音がやんだ、青い男が槍をかまえ赤い男と何かを話してる。終わったのかと思った時、青い男の持つ槍にすさまじく吐き気がするほどの魔力が流れ集まっていく。

『—————！』

それに息を飲んだ瞬間。

『誰だ—————！』

青い男が、隠れている俺をにらみつけた。

『—————！』

その瞬間、青い男の標的が自分に切りかわったのがわかった。

足が自分の意志とは関係なく走り出す。普段の自分では考えられない速度で走っていく、そうしなければ確実に自分が殺されると解っているからこそその動きだった。

『ハア、ハア、ハア。』

走りつづけ爆発寸前の心臓を落ち着かせる。どうやら校舎に迷い込んだらしい。

『あーっーっ』

静かにゆっくりと意識が覚醒する。

『いったいーっー何が起きた？』

激しい頭痛と吐き気で頭に靄がかかったようだ。自分の胸に手を当てる。

『治ってる。あの声の人が助けしてくれたのか？』

周りを見渡すと。真紅の宝石が落ちていた。

『宝石？』

自分を助けてくれた人の持ち物かと思ひポケットにしまう。

『……………帰るか。』

……………家に帰り着くころには、とくに日付が変わっていた。

『はあ、ようやく帰ってこれたか。』

気がゆるむと傷口がまた痛み出した。

『あ……………ぐっ。』

痛みも消えこれからどうするか思案していると屋敷につけられていた警報がなった。

ここは腐っても魔術師の家だ。敷地に見知らぬ人間が入ってくれば警鐘がなる、ぐらいの結界ははってある。

『泥棒か？いや、まさかさっきの奴か。』
そういえば見られたから殺すと言っていた奴が生きっていると知ったら果たしてそのままにしておくだろうか？

『迂闊、せめて何か武器になるものはないか？』

そう周りを見渡して目に入ったのは、朝藤ねえが置いて行ったポスターだった。

『ぐ、まあこれでもないよりましか。』

ポスターを手に取り強化しようとする暗示の言葉を紡ぐ。

『……同調、開始……?!』

瞬間、強烈なイメージが襲ってきた、今朝も見た〇〇が降る剣の丘。

『があ……っ。』

イメージに押しつぶされ、ふらふらと立ち上がる。

『っち、なんだこの魔力は！』

そういいながら青い男が飛び込んでくる。

『貴様、いつたい？』

だというのに俺は男を無視して、まるで神話のローレライに誘われるように土蔵へ歩いて行く。

扉を開け土蔵の中心へと歩いていき。

『坊主、いつたい何をやる気だ？』

そう言いながら男が止めようとしてくる。だが遅い。

床に魔方陣が描かれそこに倒れこむ、その瞬間。

まるで魔法のように彼女は現れた。倒れこむ自分を抱きとめながら。月の光が彼女の銀の髪を照らす、そして赤い外套を身にまとった姿を照らし出す。

『サーヴァント・フェイカー、召喚により参上しました。』
まるで妖精のような笑みをうかべて

『久しぶり、シロウ……。』
と言葉を紡いだ。

英雄との出会い（後書き）

どうでしたか？フェイカーが誰だかわかる人にはわかるかもしれない。
せん。

次から大きく話が動くので楽しみに。

変わる運命（前書き）

いよいよ今回から戦闘が入ります。

変わる運命

風が強く月の光が眩い中、彼女は現れた。

その瞬間自身の時が止まった、今自身を抱きとめている少女に己の全てを引き寄せられたかのように。

『シロウ……？大丈夫？』

目の前の少女がそう聞いてくる。しかし頭に靄がかかったように上手く返事できない。

『あ………』

『あーごめんねシロウ、ちょっとパス繋ぐ時無茶しちゃったかも。ちょっとまってね、用を片付けてくるから。』

彼女はそう言っつて真紅の槍を構えた青い男に向き直る。

『結構律儀なのねランサー、すぐに攻撃してくると思ったんだけど。』

『はっ、なーにいつてやがる。急に出てきて二人の世界に入ったのはどこのどいつだ。』

『あら、それは失礼。それじゃあなたの望むように戦いましょうか。』

『ほっ、そう言っつからはやはり貴様七人目のサーヴァントか。』

『ええ、でもここは狭いから一旦外にいきましょう、ここじゃお互い全力を出せないわ。』

『ハッー！』

ランサーはそう笑うと扉から外へ一息で飛び出た。

『シロウ、危ないから出て来ちゃ駄目だよ。』

彼女はそう言うと言ランサーを追って外に出る。

ようやくぼやけていた頭が正気に戻る。

『ば、馬鹿。』

あわてて土蔵を飛び出す。

『やめー！』

ろ、と最後の言葉を叫ぶ前に、目の前の光景に言葉を失った。

ランサー
青い男の繰り出す神速を超える槍と赤いフェイカー外套を纏った少女が白と黒の双剣で剣戟を繰り広げている。

ランサーが目に見えないほどの突き繰り出し、それをフェイカーが捌き、受け流し、防いでいる。

息も止まるような剣戟の最中ランサーは違和感を感じ戸惑っていた。
（ちっ、なんだこいつ、やりにくいっいたらありやしねえ、しかも剣捌きといい服装といいアーチャーの野郎に似ていて違和感がぬぐえん。）

そう気がそれた一瞬。

『はあー！』

懐に踏み込まれ、剣が胴体を狙って振り抜かれる。

『チーーーーー!』

舌打ちをしながら、槍を縦に構え防ぐ、それと同時にその勢いを使い一気に数メートルを飛び抜く。

『どうしたのランサー? 戦闘中に考え事なんてあなたらしくもない。』

『ふん、貴様先程からの口ぶりまるで俺を知っているようだな。』

『さあ、それはどうかしら。』

『まあそいつは別にいい、俺が今一番解らんのは貴様とアーチャーが似ていることだ。剣捌きから、体の動きといいほとんどが奴と同じだ。』

『アーチャー? そいつでもしかして白髪に私と同じ赤い外套着てた?』

『ああ。』

『そう………世界も中々融通きくみたいね。』

『なに?』

『いえ、なんでもないわ。けどそのことを教えてくれたお礼に今度は私から行くわよ。』

そう言ってなにを血迷ったか、双剣を地面に落とす。

『貴様、どういうつもりだ? まさか素手で俺と戦う気か?』

『まさか。』

そういうと構えをとりこちらに聞こえない声で呟く。

『トレス・オン
投影、開始』
すると彼女の手にランサーと同じ真紅の槍フェイカーが出現した。

『なに?!』

彼の驚きも当たり前だろう、彼の持つ魔槍は世界にただ一つしかない筈、しかしそれがもう一つ存在している。

『貴様!何をした。』

『ふ、それは乙女の秘密とでも言っておきましょうか。』
そう言いながらランサーと同じ構えを取る。

『ただ一つ言えるのは、私はセイバーじゃなくて贗作者フェイカーだって事!』
言い終わると同時にまるで地面が爆発したかのような土煙をたて、飛び込んできた。

『ぐつ。』

先手を取られながらも再び神速の突きで迎え撃つ。

激しい火花をちらしながら真紅の槍と槍がぶつかりあっていく。
どちらも高速の突き、目に見えないほどの早さで応酬していく。片方が心臓を貫こうとすれば、もう片方が受け流し、逆に眉間を貫こうとする。

(ちい、なんだこいつはさっきとは全然違いやがる。まるで鏡を相手にしているみたいだ。くそ、やりにくい、さすがにイレギュラークラスは変な事をしでかすな。だが!)

ランサーが更に突きの速度をあげる。それに対しフェイカーも速度をあげる。

(やはりな、おそらくなにかの宝具か何かを使って俺の動きをまねてるんだろーうが甘いなフェイカー贗作者、この俺が自分の動きがわからんとでも思ったか！)

剣戟の最中に一瞬だけ隙をつくる、当然のようにそこに向けて突いてくる。

『この、間抜けー！』

それをかわして渾身の突きを隙だらけの体に穿つ。

その瞬間、フェイカー彼女は笑った。

『Time alter . . . double accel

(固有時制御 二倍速)』

『な．．．こ。』

ランサーは目を疑った。フェイカーが何かをつぶやいたとたん一瞬消えたように見えたからだ。

槍を捨て素手になり拳を強化、足に魔力を溜め爆発させる、そして突きを繰り出し勢いついているランサーの腹部に肘を叩きこみー！
『飛べー！』

その勢い全てを使いあり得ないほどの力を込めた拳を叩き込んだ瞬間、拳から膨大な魔力を放出した。

『がぁー！』

最低限の受け身を取りながらも数メートル吹き飛ばされる。いかに

サーヴァントといえども今の一撃は致命傷に等しい。

『Release alter (制御解除)』

『ちつ、随分派手にやってくれたな、まさかここまでだとはな。』
槍を使い満身創痍な体を起こす。

『貴様、いったいどこの英雄だ、アーチャーの野郎も得体が知れんが貴様のほうがわからん。人の武器を出すは、動きまでそっくりに真似やがる。そんな英雄俺は少なくとも聞いたことがない。』

『さて、誰でしょうね？ただ一つ言えるのはあなたの言うような英雄が目の前にいるという事実だけ。』
とまるで花の咲いたのような笑顔で笑う。

『くつ、そいつは確かにな現に俺の前に居るか。だがおしいな、お前がそれだけの力があるなら万全の時に戦りたかつたぜ……』

この勝負お前の勝ちだ。
『そう潔く負けを認める。』

『いえ、そうでもないわよあと少しあなたが速かったら私の負けだったわ。』

『なに……？』

フェイカーがそう言い終わると同時に彼女の口から真紅の血液が流れた。

『あれをやるとかなり体に負担がかかるのよ。』
ややふらつきながら答える。

『さて、ランサー勝負は私の勝ち、だから一つお願い聞いてもらおうよ。ランサー、あなた私のサーヴァントになりなさい。』

ランサーはきよとんと間の抜けた顔をして

『お前、何言ってるんだ。んなこと出来る訳ないだろうが。』

『残念、それができるのよ。さあランサー選びなさい、敗者のままこの戦争から降りるか、私のサーヴァントになって戦い抜くか、それとも強制的に私の下僕になる？』

そうまるで悪魔のような笑顔で契約をもちかける銀の悪魔。

『くっ、面白い。いいだろうその契約のってやる、このまま終わるのは俺としても許せんからな。』

そう誓いの言葉を口にした。

『ふふ。』

銀の悪魔は笑いながらランサーに近づき、いつのまにか持っていた短剣でランサーを刺した。

『む。』

その瞬間、ランサーをこの世に繋ぎとめていたパスが切れ存在が消え始める。

『……告げる！汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に！聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら……』

濃密な魔力があたり一面に吹き荒れる

『……我に従え！ならばこの命運、汝が剣に預けよう……』

『……』

『ランサーの名に懸け誓う、我が名はクーフリーン。我が槍は主の道
を阻むものを貫く物、此处に契約は完了した。貴女を我が主と認めよう。』
契約が成った瞬間、膨大な魔力がその場を包んだ。

変わる運命（後書き）

どうでしたか？魔力を爆発云々はスキルの魔力放出なので納得してください。

セイバーが剣で打ち合う時とかに魔力放出を使うので、こういう使い方もありかなと思ったので。固有時制御のあたりについては物語が進めば解るので今はまだ突っ込まないでください。それでは読んでいただきありがとうございます。

廣作者・前編（前書き）

皆さんお久しぶりです。体調を崩してしまい投稿が遅れてしまいました。体調が悪かったの内容的に物足りないかもしれませんが、勘弁してやってください。

*前回感想で、ソードダンサーと言う同人誌に似ているとご指摘がありました。私は内容を知らないので設定が似かよってしまった部分があるかもしれませんがご容赦ください。こういった作品が駄目な方はブラウザの戻るボタンを押して戻ってください。それでは楽しんでってください。

廣作者・前編

『さて、これからどうするんだマスター？』

『そうね、なら現在の状況の情報収集をお願い。』

『なに、またかよ・・・、まったく俺は何所に行ってもこんな役割かよ。』

と、あきらかに落胆するランサーに対し

『まあそう言わない、まず貴方の傷を癒えるまちなさい。それに貴方の存在は隠しておきたいからこのまま霊体化しておいてね。』

『はあ・・・。おっと、言い忘れていたが、前のマスターについては何も言わないぜ、赤枝の騎士の誇りにかけてな。』

ランサーの言葉にきよとんとした顔で見ると

『ふふ、大丈夫。わかってるわよランサー、ほらほらシロウがくる前に消える！』

『はいはい、了解だマスター。』

そうため息をつくとき空気に同化するように消えていった。

赤い少女が見たこともない歪な短剣で青い男を刺して何かを呟いた瞬間、もの凄い魔力が発生し、その影響で衛宮士郎は一時的に全感

覚が麻痺した。ようやく立ち直った時には青い男の姿は消えていた。
『な、なにが起こった？あの男は？』

『あらシロウ、出てきちゃいけないって言ったのに。』
そう笑いながら近づいてくる少女

『お前は、いったい……。』

『あら、女の子に向かってお前は無いんじゃないのシロウ？』
やや口調を強くしてしゃべる。

『え、あ……すみません。じゃなくて、いったいなんだ？さっきの男もそうだったけど信じられないほどの魔力、人間じゃないよな？』

『そうね、その質問に答えてあげたいけど残念、時間切れよ。』
- -
- いつまでそうしているつもり？そのネズミさん。』
そうその全てを射抜くような目で扉の外をにらみつける。

――その数分前

新都の街をアーチャーに補助してもらい駆け抜けてゆく

『まったく、私としたことがあんな簡単なミスをするなんて。』

『まったく、唸っていてもしょうがあるまい。君があの一一般人の記憶を消し忘れたのが悪い。まあ、過ぎたこと後悔していてもしかたがないだろう。』

そう嫌味を言いつつフォローを入れる。

『わ、わかってるわよ。それにしても誰よあんな所に結界はった奴、学校おかげ大変な一日になったわ。』

そう言いつつ今日一日あつた事を思い返す。

《時をさかのぼり、早朝遠坂邸》

『うー、なんか頭がくらくらする。いったいどうしたんだっけ？』

そう頭を抱えて唸っていると。

『あ、そっか私遂にサーヴァント召喚したんだっけ。』

(そういえば居間どうなってるかな？瓦礫だけでも片付いているといいんだけど。)

そう思いながら、着替えを済ませ、寝ぼけた頭をさっぱりする為に顔を洗いにいく

『ふう、さっぱりしたわ……』

そして洗面所から戻り居間の状況を確認しに行くと

『嘘、全部元通りになってる。』

少なくとも屋根の残骸だけでも片付いていればいいと思ったのに、今日の前に広がっているのは元通りになった居間と紅茶を淹れていアーチャーる赤い男の姿だった。

『む、起きたかマスター、今起こしに行こうと思っていた。起きたのなら席に着きたまえ、今紅茶を淹れた所だ。』

そう促されるままに席に着くと目の前に、いつもより良い香りの紅茶が差し出された。

自然と手が紅茶に伸び、口に含む。

『おいしい。』

アーチャーはそんな私の反応を満足そうに眺めた後

『私は朝食の支度をしてるので少し待っていてくれ。』

そう言い残してキッチンへと姿が消えていった。

『むー、私の淹れたお茶よりおいしい。なんで同じ葉を使ってるのに此処まで味が違うのよ。』

そう言いながらもしつかり味わっていると。キッチンから出て来たアーチャーが慣れた手つきで食事を用意していく。

こんがり焼けたトーストにふわふわのスクランブルエッグそしてしやしやきのサラダ。

『材料がこれぐらいしかなかったのな、すまんがこれで我慢してくれ。』

『………あんた本当に英雄？家にあった材料でよくこれだけ作れたわね。』

『別にいいだろうマスター。それとも食べないのかね？』

『た、食べるわよ。』

そう言いながらスクランブルエッグを一口食べる。

『！』

驚いた、中はとろとろなのにふわふわサラダもお手製らしいドレッシングがサラダによく合う。私も驚くぐらいの速度で次々と減っていく。

全てを食べ終わりホッと一息つく

『……………あ。』

なにやらニヤニヤしながらアーチャーがこっちを見て笑っている。

『ふむ、食事の感想を聞こうと思ったがその必要は無かったな。』

ぐっ、ま、負けた思わず夢中で食べてしまった。

『たしかにおいしかったわよ、全く料理が出来る英雄なんて……
そうだ！大切なこと聞き忘れてた。』

アンタいったいどこの英雄？』

そう慌てて聞くと心底困った風に口を開いた

『そのことなのだがマスター。どうやら召喚時のショックで記憶に混乱している。』

『は？……………えーっとそれってつまり自分が誰だかわからな
いって事？』

『その通りだマスター、だがこの責任は君にもあるのだぞあれだけ
強引な召喚は初めてだおそらくそれが原因で記憶に混乱があるの
だろう。だが別に気にすることは無い。』

『無いって、無いわけないでしょ。自分のサーヴァントの強さがわからないんじゃない、戦略一つ立てられ ないし、アンタだって宝具が使えないじゃないの。』

『それでもだ。私は君が召喚したサーヴァントだろう。それが最強で無い訳がなからう。』

そう不意打ち気味に、自身の言葉に絶対の自信を持ってそう告げた。『フーーーーー。』

迂闊、自分で自分の顔が真っ赤になっていくのがよくわかる。

『そ、そう。アンタがそう言うんだ正体は後回しにするけど、記憶はちゃんと戻るんでしょうね?』

『ああ、それについては心配ないおそらく一時的に記憶が混乱しているだけだ。時がたてば回復するだろう。』

『そう、わかったわ。』

そう言い終えた直後に時計が鳴る。

『嘘、もうこんな時間? 急いで学校行かなくちゃ。』

と慌てて準備をしていると

『マスター、聖杯戦争中だというのに学校に行くのか? 危険だ、敵マスターの襲撃にあうかもしれ ン。家にいたほうが安全だ。』

『アーチャー、私はたかだか聖杯戦争ぐらいで普段の生活を変えたりしない。それに聖杯戦争は人の目を忍んで行われるものよ。まさか学校で堂々と襲撃してくる馬鹿はいないでしょう。』

『ふむ、だが君の学校にもマスターがいるかも知れんぞ。』

『ああ、その心配は必要ないわ。昔はいたんだけど今は衰退しちゃって参加はできないわ。それに真つ 先に確認したもの。』

『わかった。だが何事にも例外はある。それに私も霊体化して君を護衛することにしよう。かまわない な？マスター。』

『ええ、心に留めておくわ。』

そう言っ学校に出かけようとする

『待ちたまえ、マスター。』

『なに？急いでるんだけど。』

『マスター、君は何か大切な事を忘れていないか？』

『大切な事……？』

『そうだ契約においてもっとも基本的で大切な事だ。』

『……あ、名前。』

『まったく、やっと理解したかね。君の名は？私は何と呼べば良い？』

『凜、遠坂凜。呼び方は好きにすれば。』

ぶっきらぼうにそう告げると

『では凜と。．．．ああこの響きは君に良く似合っている。』

『な．．．．．。』

再び顔が赤くなってくる。この短時間で二度目だ。どうしてこの男はざらりとこんな台詞が言えるのか

『む？どうしたマスター。顔が赤いぞ、具合でも悪いんじゃないのか？』

『べ、別になんでもないわよ。』

そう言って赤くなった顔を隠すように走って家を飛び出してく。

廣作者・前編（後書き）

どうでしたか？本来は一話になる予定だったのですが、さすがにこれ以上更新しないのは不味いと思ったので前、後編にわけさせていただきます。後編は出来るだけ早く更新したいと思っているので、次回もまた読んでやってください。

*ソードダンサーと内容が似ているやパクリといった批判はおやめください。

廣作者・後編（前書き）

皆さんあけましておめでとうございます。今更何言っただとか言わないでください。今回は文量が多くなり投稿が遅れてしまいました。今回でフェイカーの正体はほぼ解ってしまうかもしれませんが（苦）それでは是非読んでください。

それからは休み時間や放課後などを利用して学校のあちこちにある基点を潰していく。幸いアーチャーは歪みを見つけるのが上手く順調に進んでいった。

そして屋上にある基点を潰そうとした時

『おいおい、なんだ消しちゃうのか？もったいねえ。』

そう、自身より圧倒的に上の存在を感じた。

それから相手は深紅の槍を何処からともなく取り出した。

『ランサー槍兵のサーヴァント……！』

それを見てから頭より体が先に動き、少しでも自身の有利になるように校庭へと移動した。

それからの私は初めてサーヴァントの戦いを見た。ほとんど深紅の残像しか見えない程の突きを繰り出し相手を仕留めようとするランサー、それに対しアーチャーは二本の双剣を使いランサーの突きを捌いていく。それは既に人間の立ち入る領域の物ではなかった。

しばらく剣戟が続いた後、ランサー殺気が膨れ上がり、彼の持つ槍が凄まじい勢いで魔力を周りから食らいはじめた。あれは良くない、あれが発動すれば、いかにアーチャーでもやられてしまうだろう。

しかし、アーチャーはまるでそれが関係無いように、ランサーの前

に立ち塞がった。

そして、深紅の槍が放たれようとした瞬間。

『誰だ!』

予期せぬ第三者の手によってその一瞬が崩された。

『ちっ、この勝負預ける。』

そういうとランサーは人影を追って去っていた。

私は忘れていた呼吸を戻すと同時に

『助かった。それにしても今のって生徒?まだ残ってる奴が居たの?』

『凜、ランサーを追わなくていいのか。どうやらさっきの人影を追っていったようだ。』

『あ・・・しまった。アーチャー今すぐランサーを追って。』

『了解した。』

(あいかわらず、細かいところであつかりするのか君は。)

そして、アーチャーの後を追って私も校舎に入る。そこで血の海の中に倒れている人を見つける。

『アーチャー、ランサーは?』

『どうやら目撃者を殺した後逃げたようだ。』

『そう、ならランサーを追って、もしかしたらマスターが解るかもしれないし。』

『了解した。だがもし他のサーヴァントに襲われたりしたらー』

『ええ、解ってるわ。だから行って。』

私の言葉を聞くとアーチャーはランサーを追っていった。

『さて、何処の誰だか知らないけど運が無かったわね。これも運命だと思って諦めなさい。』

そう言うとうつぶせになっている体を仰向けにする、そして見えてきた顔は。

『なんで・・・よりもよってあんななのよ!』

そこに現れたのは彼女の大切な妹が毎日通っている家の男だった。

体に触れ、まだ温かいことを確認する。

『まだ、生きてる、それなら。』

そして自分の切り札である宝石を見て

『あー、だから私は甘いんだろうな。』

そう言うとその男、衛宮士郎の治療を行った。

治療が終わり、直ぐにその場から離れ家へと戻る。

『あー、もう疲れた。初日からこんなにハードなんて。』

それからしばらく居間で体を休めていると

『すまない、見失った。』

そう言つてアーチャーが帰ってきた。

『そう。まあしょうがないわ。今日はランサーの情報が解つただけでも良い事にしておきましょう。』

『了解した。所で凜、一つ聞いても良いか?』

『なに?』

『あの倒れていた小僧はどうした?』

『え?一応助けてそのままにして置いたけど。』

『記憶を消したりはしたのか?』

『あ。』

『それでは、我々の事を目撃した一般人を生きっていると解つたらランサーはどうすると思つ?凜。』

顔が一気に青ざめていく

『しまった。行くわよアーチャー。』

慌てて衛宮低へと向かう。

『……いつまでそうしているつもり？そのネズミさん。』

そういいながら全てを射抜くような目で塀をみる。

すると塀を飛び越えて姿を現す。

『こんばわ、衛宮君。』

そう不敵な笑みで現れたのは紅い服を着た男を連れた穂群原学園きつての優等生の遠坂凜だった。

『と、遠坂？どうして家に？』

『どうしたもこうしたも無いわよ。衛宮君、あなたも魔術師だったのね。』

『っ…』

なにも言い返せないでいると呆れたように、そして今までのイメージが壊れる程の笑みで

『まさか私のすぐ傍ですつと隠してくるなんてね。さて衛宮君覚悟は良い？貴方がマスターだと解った以上手加減はしない。』

そう言つと戦闘態勢に入る遠坂と赤い男。

『待ちなさい。アーチャーとそのマスター。』

いままで黙っていたフェイカーが口を開いた。

『先に言っておくけどシロウは聖杯戦争について何も知らないわよ。』

『え？・・・聖杯戦争を知らない？』

『ええ、彼はまったく何も知らないわ。』

『ああ、いきなり聖杯戦争だマスターなんて言われても困るんだが。』

『え？え？もしかして本当に知らない？』

『ええ、そもそも普通の魔術も碌に出来ないのに聖杯戦争なんか知ってると思う？』

『そうだぞ遠ーってなんで俺が魔術が下手なの知ってるんだ？』

そう士郎の質問に対し小悪魔な笑みをうかべて

『秘密。』

『それじゃ何？碌に魔術も使えないのにセイバーを召喚したの？』

『いいえ、私はセイバーじゃないわよ。アーチャーのマスターさん。』

『セイバーじゃない？それじゃあいったい何なのよ。格好がアーチャーに似てるけどまさかあんたもアーチャーとか言わないわよね？』

『ええ、私はアーチャーでもなく、ましてセイバーでも無いわ。私はそう鷹作者フエイカー。それ以上でもそれ以下でもないわ。』

私のその一言に微かに反応するアーチャー。

『鷹作者フエイカー? イレギュラークラスのサーヴァント。』

『はい、正解。それでどうするのこれでもいきなり私と戦う?』

しばらく遠坂は考えこんでいたが顔を上げると

『解ったわ。いきなり何も知らない相手を攻撃するのは私の主義に反するし、私に解る事なら教えてあげる。それでいいわね。』

『良いわよ。』

『ああ、ありがとう遠坂。』

そう笑顔で礼を言うと

『べ、別になんでもないわよ。それより家に入らせてもらっても良い? 寒いんだけど。』

(アーチャーといいこいつといいなんでこう私の調子を狂わせるかな。あーもう。)

真っ赤な顔でそう言われた

『あ、気がつかなくて悪い。』

そう言うと家へと招き入れる。

『アーチャー、貴方は外を見張って。』

『解った。だが一つ言っておくぞ凜。あの小僧にあまりかかわるな

よ。』

それだけ言い残して屋根へと跳躍するアーチャー。

『あ、シロウ。私も屋根で見張ってるからちゃんと話聞いておいてね。』

『お、おいフエイカー。』

それだけ言い残すとアーチャーと同じように屋根へと上がっていつてしまった。

夜の冷たい空気の中、屋根の上で鷹の目を使い周囲を探っていると
『調子はどう？アーチャー。』

自分と同じ格好をした女が現れた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『あれ、無視？それは酷いよ。』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『はあ・・・・・・・・。。』

しばらくの間沈黙が下りる

その空気を破ったのはアーチャーだった。

『貴様。一体何者だ。』

『私？誰だと思っ？』

『ふざけるな。私は貴様の正体を聞いているのだ。』

『私の正体？それは言えないわ。一つ目に今は聖杯戦争中、普通に考えて相手のサーヴァントに自分の正体をしゃべると思っ？二つ目に私は貴方に自分の正体を言っつもりはないわ。』

『ほう。ならば何故私と同じ格好をしている。貴様は生前の私を知っているとも言っのか。』

アーチャーのその問いに

『ふふ、秘密。』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

それからお互いにしゃべらず。時だけが過ぎた。

『アーチャー、戻ってきて。』 『おい。フェイカー何処だ？』

下の方から声が聞こえてくる。

『了解ーーー。』

そう返事をする下下に飛び降りていく

『いったい奴は何者だ。未だに記憶が混乱しているとはいえ、私と同じ姿をしているなら確実に関係がある筈。そして、何より奴を私

は確かに知っているような気がする。』

そう考えつつ凜の元へと戻っていく

『シロウ、凜にちゃんと話は聞いた？』

『ああ、一通り大切な所は。』

『詳しい事は、この戦争の監督役をやっている奴の所に行くわよ。』

『解ったわ、それじゃ急ぎましょ。その監督役をやってる奴は何所にいるの？』

『この街にある協会で神父をやってるわ。かなり性格が捻くれてる奴だから気をつける事。あいつは平気で人の弱みを攻撃してくるから。』

そう冗談では無く真面目な顔で告げられた。

『ねえ、一つ聞きたかったんだけど。貴女がランサー倒したって本当？』

協会への移動の最中遠坂がフェイカーと会話しながら進んでいく

『ええ、倒したわよ。』

『嘘、あのランサーを？アーチャーですらあんなに手こずっていた

のに。』

『まあ、不意打ちみたいなものだけどね。それにランサーは令呪が効いてて全力を出せていなかったし。』

『へえ……。不意打ちって言うてたけどどうやって倒したの？』

『秘密。いくらリンでもこれは教えられないわ。シロウも言っちゃ駄目よ。』

『ああ、といっても動きが早すぎて目で追うので殆ど解んなかったけどな。』

『ちつ、残念情報が得られると思ったのに。』

とものすごい悪態をつく遠坂。

『というか遠坂、学校では猫かぶってたんだな。』

その瞬間

『何？何か言ったかしら衛宮君？』

とものすごく素敵な笑顔で微笑まれた。

『い、いやなんでもない。なんでもないぞ。』

と慌てて否定していると

『凜、着いたぞあれではないのか。』

今まで黙っていたアーチャーがそう言ってきた

『それじゃあ士郎行くわよ。アーチャー、貴方はここで待ってて。』

『了解した。』

『シロウ、リン私はここに残るわ。』

『?どうしてだ。』

『私が姿を見せたらその監督役に姿見られちゃうでしょ。あまり私の情報はあげたくないから。それになにかこの協会は嫌な感じがする、だから士郎気をつけて行ってきなさい。』

『?ああ、解った。』

『いい?それじゃ行くわよ。』

そう言うと協会の中へは行って行った。

『.....』

『.....』

お互いにしばらく無言で立ち尽くす。

そして

『アーチャー、さっきの質問だけどーっただけ答えてあげる。』

『何?』

『生前の私は正義の味方をしてたわ。』

『貴様.....!』

凄まじい殺気でこちらを睨んでくる。

『どういう意味だ。』

『さて、どういう意味でしょう。貴方がそれを一番知っているんじゃないくて?』

アーチャーの殺気が大きくなり一触即発の状況になる

『おまたせ・・・ってどうしたのアンタ達?』

そこへ協会から出てきた凜の一言によって壊された。

『いや、別になんでもない。』

そう言うとアーチャーは霊体化した。

『シロウ、なんか具合悪そうだけど大丈夫・・・?』

『ん、ああ大丈夫だ。』

それから皆無言で歩き続け坂を降りきった所で

『それじゃ衛宮君、ここでお別れね。』

『遠坂はどうするんだ?』

『私はこれから行かなきゃ行けない所があるから。ここでお別れ。』

『そうか、なら手伝ー』

『勘違いしないで、今日貴方をここまで連れてきたのは、今の自分の立場を確認させるため。決して仲間になったわけじゃないから。明日から私たちは敵のマスター同士それを忘れない事ね。』

それだけ言つと別の道へ行こうとすると

『話はそれで終わり?』

小さな妖精のような少女、そして絶対的な恐怖が立ちふさがっていた。

『……………』

『はじめまして、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言います。以後お見知りおきを。』

と優雅に挨拶をし一礼する。

『アインツベルン……………!』

『ふふ、さすがに凜は聞いたことあるわよね。それによつやく会えたねお兄ちゃん。』

『君は……………』

『昨日会ったのにもう忘れちゃったの……………? まあいいわ、だつてお兄ちゃん達ここで死んじゃうんだもの。』

黒い巨人が前に出る。

『バーサーカー……!』

『それじゃ皆殺しちゃうか……。ら。』

その一言で戦闘体制に入るアーチャーと凜。だが、

『あ、貴女。貴女は何?』

そうおびえたようにフェイカーを指した。

『……。いつまでそんな操り人形になっているつもり。』

そう一言が放たれた

『……。!何貴女は、バーサーカー今すぐこの女を殺しなさい
!』

そう死を解き放った。

『――――!』

『士郎下がつて!』

そう言いながら両手に夫婦剣、干将・莫耶を構える

轟と音がし黒い破壊の嵐が吹き荒れる。

双剣を構え、小柄な体を生かして一撃をかわしていく。

『つつ、速い。』

後ろからアーチャーの援護が入る、常人な粉々になるような弓の一撃を受けてもバーサーカーには傷一つつかない。

いつしか雪が降り始めた、その中で

『……………!!!!』

ひとときわ大きい轟音

『……………!!』

その一撃を受け止めきれず壁に弾き飛ばされるフェイカー

『フェイカー……………!!』

『大丈夫よ、シロウ。』

そう言いながら立ち上がる

（解っていたけど、強い。さっき固有時使わなきゃ良かった……仕方がない。）

『仕方がない、こっちも全力でいくわよ。バーサーカー!!』

そう叫んで持っていた干将・莫耶に魔力をこめて投げる。円を描いて飛んでいき、こちらに向かってくるバーサーカーに触れる瞬間。

『ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想』

バーサーカーで爆発が起こる

『……………!!!!』

バーサーカーが怯むその一瞬にハルバードを投影する。
トリス・オン
『投影・開始』

その際、次の設計図を頭に浮かべる。

手にしたハルバードを強化し、身体を一回転させバーサーカーを薙ぎ払う。バーサーカーもそれに気付き手にした斧剣で弾こうとする。刃が激突し、弾き飛ばされる。

その時フェイカーの後に剣がざつと20程浮いていた。それらはフェイカーが自身の姿を使って隠していたものだ。弾き飛ばされながら、剣群を射出する。刃が触れる瞬間、バーサーカーを先程とは比べようがない爆発が襲う。

『……………!!!』

その次の瞬間、雪の舞う空にまるで妖精のように舞った。

バーサーカーが目標を見失い、気がそれた瞬間、ひと際強いアーチャーの一撃でバーサーカーの気が再びそれ、空中で再び干将・莫耶を投影し、まるで翼のように形を変え

『はああ……………!!!』
バーサーカーを頭から断ち切った。

『嘘。あのバーサーカーを倒した？』

それは誰の一言だったか、魔力を使い動けないフェイカーの前で再びバーサーカーが動き出した。

そしてその剛腕で薙ぎ払われた。壁に叩きつけられるフェイカー。

『が……………つ。』

そしてフェイカーに凶刃が振り下ろされる！

『不味い、アーチャー。』

アーチャーが攻撃のモーションに入るだが間に合わない。
刃が振り下ろされる瞬間、誰にも聞き取れないような声で

『やっぱり、バーサーカーは強いね。』

廣作者・後編（後書き）

どうでしたか？少し腕がなまったので文章的に変な所とかがあるかもしれないのでビシビシ指摘してください宜しくお願いします。

異常（前書き）

楽しみにして下さっていた皆様、長い間本当に申し訳ありませんでした。春となり環境が変わって投稿するのが遅れてしまいました。これから投稿再開していくのもう一度長い目で見てください。それではもう一度本当におわび申し上げます。

異常

死の凶刃がフェイカーに向かい………
彼の凶戦士は、その瞬間言葉を聞いた……
総ての生物に等しく死を与える極寒の地で、彼が必ず護ると誓った
小さき者と同じ、理性を失った心に直接響く言葉を……。

『フェイカー……！』地面すら砕く一撃がフェイカーを襲う。
(不味い！)
フェイカーに向けて走り出す。

(間に合わない………！)

だが……次の瞬間、死がフェイカーの眼前にて止まる。

『……バーサーカー？』

凶刃を退かし、静かにフェイカーを見つめる。

『……っ、何やってるのバーサーカー！早くその女を殺しなさい。』

紅き贗作者は立ち上がり。雪の降りしきる中痛む体を動かしながら、
黒き巨人に触れ。

囁くような声で

『ありがとう。バーサーカー。』

と言葉を告げた。

そして、凶戦士は身を翻して、

『ちよつと離しなさい。バーサーカー！何をしているの！』
白き妖精を抱え、その場から姿を消した。

『……………』

よろめきながら、壁に手をつく。

（流石にキツイわ）

圧倒的な殺意を持っていたバーサーカーが居なくなり、

『だ、大丈夫かフェイカー……………！』

フェイカーに近寄ろうとした瞬間、視界に白き夜に合わぬ黒き影が音もなく接近してくるのが見えた。

（なんだ？）

その三つの黒い影が、立ち上がったばかりのフェイカーに向かって何かを高速で投擲するのが見えた。

『……………！フェイカー……………！』

そう叫んで、躊躇い無くフェイカーの前に飛び出した。

『フェイカー……………！』

『シ、シロウ？』

声と共にこちらを庇うように衛宮士郎が飛び込んで来るのが見え。

次の瞬間、衛宮士郎の体を黒い何か貫くのが視界に入った。

『シ、シロウ！』

体の痛みも忘れてシロウを抱き止める。

そして黒い針のようなものが翔んできた方を見て。

『アサシン！！』

敵は攻撃が失敗したのを悟ると、第二撃が放とうとし……。後方からの一撃に二人が貫かれた。

『壊れた幻想。』

声と共に二人が爆発した。

『ギギ・ギ！』

辛うじて避けたアサシンは襲撃に失敗したと悟るなり黒い外套を翻し逃げ去っていった。

『一匹逃したか。』

弓を構えた紅い騎士がそう言う。

『シロウ、シロウ！』

紅い少女の叫びにも答えず。

薄れゆく意識の中で

(ああ、大丈夫みたい……だ・な。)

そして完全に意識が途絶えた。

『衛宮君?! アーチャー、アイツを追って!』

『了解した。』

そういつてアーチャーがアサシンを追って、凜が駆け寄ってくるが構わず、シロウの体を横たえて傷の具合を見る。

(……幸い急所は外れてるわね。これなら鞘があれば大丈夫か……でも手当と休ませなきゃ。)

『衛宮君は?大丈夫なの?』

シロウを担ぎながら答え

『ええ、致命傷は外れてるわ、でも手当をして休ませなきゃ。凜、貴女はどうする?一緒に来る?』

そう言うとしばらく考え込んでいた凜だったが。

『……ええい、せっかく人が助けてやったのにこのままだと後味悪いし、ついて行かせてもらおうわ。』

凜がそう言うと目を細めてクスリと笑うと

『それじゃ先に行ってるから。』

そう言っただけささで行ってしまった。

『は………？ってコラ私を置いていくのか………！』

慌てて後を追いつけていく。

凜たちと別れ、アサシンを追跡していくと

(アサシンだと、まだ記憶が安定しないがこのタイミングで現れるのはおかしい。やはりあの女が召喚された事でこの聖杯戦争も変貌している。)

そう考えながらいると

(殺気!?)

横から何か槍のようなものが飛んで来る。

『ぐ、何者だ。』

かわして地面に降りると雪の降る夜に合わない黒い外套を被った存在が現れた。

『貴様、何のつもりだ。』

答えは無い、だが返答は剣による斬撃だった。

『ちっ、それが答えか。』

異常（後書き）

久しぶりの投稿で尺が短く文章が悪くなっているかもしれませんが、どうかご了承ください。次回投稿から尺も長くしていく予定なので是非続きも宜しく願います。

分岐（前書き）

最初に、投稿がおそくなり、今まで長い間すみませんでした。下手な言い訳はしません。本当にすみませんでした。また読んでいただけるのなら宜しく願います。

分岐

漆黒の閃光が走る、一閃を投影した干将・莫耶で捌き距離を離す。相手もその隙を逃さず、一気に距離を詰め攻撃してくる。

（ちっ、手強いな。この太刀捌きは下手をすると彼女以上かもしれん。）

左からの斬撃を干将で受け止め莫耶にて返す。

敵は屈んでかわし、こちらを穿とうとする。

後ろに向かつて跳躍し、避けると同時に干将・莫耶を投擲する。死角からの一撃、本来ならどんな英傑であろうとも無事では済まない。

だが、漆黒の騎士は飛翔してくる一撃を確認もせずただの一振りで弾き飛ばす。

そして、無手となったこちらに対し追撃をかける。

体勢を立て直し、こちらの間合いに敵が踏み込んだ瞬間

『トレス・オン
投影・開始』

再びその手に干将・莫耶を作り上げる。

気配で敵が動揺するのがわかる。

それはそうだろう、先程叩き落として手元に無い筈の双剣が現れたのだから。

そして手にした双剣を漆黒の騎士に対して振り抜いた。

『・・・・・・・・・・!!』

『なに・・・・・・・・?』

切り裂いた。

あれだけの技量を持った敵がこうもあっけなく斬られ、確かに斬り裂いた筈なのに本来あるべき手ごたえがない。

不審に思い姿を確認するとまるで地面に吸い込まれるように姿が消えていった。

(何だ?サーヴァントにしては異質すぎる。)

周囲を確認し

(ふむ、あのようなのが複数現れんとは限らんしな、ここは一旦戻るとしよう。奴らの動向も気になる。)

『ふう、治療終わったわよ』

そう言いながら、ペタンと座り込む。

あれから怪我をした士郎を担いで家まで戻り、居間で凜による治療をうけている。

『一応、傷の手当てはしたけど治療する前に傷が塞がり始めてたし・・・まともな身体じゃないわね。』

そう言つてフェイカーを見る。

『貴女、何か衛宮君の身体について・・・つて何してるの？』

そう疑問の声をあげてフェイカーを見ると

そこには寝ている士郎の顔を覗き込んでいるフェイカーが居た。

『ふむ、傷は殆んど塞がつてるみたいね、彼女も居ないのにこの治療力・・・でも、足りない。今回の聖杯戦争は私自身が居る事も含めてイレギュラーが多すぎる。あのアサシンといい、やっぱり保険はあつた方が良いか。』

そう言つて身体を起こすと懐に手を入れ、真紅の光を宿した宝石を取り出す。

(！！あの宝石は私の宝石と同じ。)

何処からかナイフを取り出し、自らの指を切り、流れ出た血を宝石に浸す。血に浸された宝石は心成しか先程より輝きを増したように見える

『ちょっとあんたその宝石一体どこ・・・っ！』

凜が宝石について問い詰めようとした時

紅い贗作者は宝石を口に含み、眠っている土郎に唇を重ねた。

『ん……………』

舌を使って唇を割り宝石を押し込んでいく。

暫くの間、唇が触れあう音しか聞こえなかった。

『ふう……………っん。』

どれくらいそうしていたのかかなり長い時間が経ち、互いの唇が離れる。

顔を真っ赤に染めながらこちらに向かって口をパクパクさせている凛に

『あら、どうしたのリン？そんな呼吸出来ない魚のような顔をして。』

外見に似合わない妖艶な笑みをもって問い掛ける

『ふ、ふん。いきなりそんな事始めたからびっくりしただけよ。』

『ふふ。そう？意外とウブなのね。』

『……………！よ、余計なお世話よ！それより一体今何をしたの？そ

れにあの宝石はなに、何処で手に入れたの。』
興奮しながらフェイカーに問い詰めてくるのをかわしながら

『落ち着きなさい。あの宝石はある知人から貰ったの。それに何を
したかは秘密。貴女が敵にならないとは限らないからね。』

フェイカーがそう言うのと体が緊張し始める。いくら今まで友好的な
態度をとっていても相手はサーヴァント、アーチャーが居ない今襲
われればひとたまりもない

一瞬で身構えた凜を見ながら苦笑いして

『安心して、貴女を殺すつもりはないから。第一にシロウが許さな
いわ、まあ私も貴女の事嫌いじゃないし。』

その一言で張り詰めていた空気が霧散する。

『そう、わかったわ。貴女もだまし討ちなんてするようなタイプじ
やないし、信用するわ。』

『ふふ、ありがとう。それじゃ少し休みなさい。シロウは私が見て
るし、見張りもしておくから。』

そう言われると

『解ったわ。どちらにしるアーチャーが戻ってこないとこれからの
事も対策立てられないし、お言葉に甘えさせて貰うわ。』

そう言うつと壁に寄り掛かるようにして目を閉じた

(あの宝石といい妙に衛宮君の事を知っていることといい、なにか
おかしいわね。用心しておいても損はないわね。)

目を閉じた凜を見て

（ふう。記憶にあるより苛烈ね。魔力使いすぎて苦しいし。はあ、出来ることはしておくか私の願いの為にも。）

そう思い立ち上がって庭に出る。雪の舞う中、懐から宝石を取り出し何かを呟く、すると宝石が鳥の形をした姿へと変わり夜空に舞い飛び去って行った。

『行きなさい。私の望みを叶える為に、空の世界に引かれた境界へ。』

雪の降りしきる中、白い世界に紅い光景が見えた、どこまでも紅い、紅い筈なの白い世界を。

分岐（後書き）

長い間書いていなかったたので変になっている部分もあるかも知れませんがご容赦ください。色々勉強になるのでまた感想をよろしくお願ひします。

イレギュラー（前書き）

皆さん、お久しぶりです。今回は話の構成に手間取り投稿が遅れてしまいました。新しいキャラが出てくるのでお楽しみに。

イレギュラー

夢を見ていた・・・紅く、紅く、紅い世界。

充滿する死の匂い、人が焼け、建物が融解していく。辺り一面から助けを求める人の声、紡がれていく怨嗟の声。その紅い世界を踏みしめ歩んで行く。何か、自身でも解らない感情に支配され先へと進む。

景色が紅からくすんだ紅へと変わり、剣の丘へと辿りつく。

あたり一面を埋め尽くす剣、剣、剣、その間を進み、約束の丘へと辿り着く。

誰もいない筈の丘、そこに立ち尽くす、体中を剣に貫かれた・・・

ソレを視界に入れた瞬間、景色が入れ替わる。

白い世界、一面が白く、白く。

生命いのちの鼓動が途絶えた孤独な世界。

雪が降る、白い筈の世界に血のように、紅い、紅い、雪が。

そんな中、何所かで見たことあるような女性ヒトがいた。

懐かしい感じに体が引き寄せられていく。

唐突に女性が振りかえった。だが、なぜか顔が解らない、視界には

いつている筈なのに意識から零れてしまう。

『あら、こんな所にまで来たの？』

そう言うと、うつすらと微笑む

『此処は本来貴方の来る場所じゃないんだけど、歓迎するわ。』

言葉を返そうとすると声が出ない、意識が急速に白くなっていく

その様子を見て

『残念、来たばかりなのに時間切れみたい。話したい事はたくさんあるけれど、また今度ね。』

その言葉を聞くと完全に意識が途切れていった

意識がだんだん浮上してくる。

『ん・・・・・・・・。。』

意識が戻るのと同時に体に鋭い痛みが走る

『つ・・・・・・・・。。つく！』

痛みに顔を顰めながらも目を開こうとすると、鼻腔に甘い香りが漂ってくるのを感じた。

(なんだ……?)

目を開けた瞬間、眼前にフェイカーの顔があった。

『な……』

『おはよう、シロウ。』

そう、微笑んだ。

『う……あああああああああ!』

叫び声をあげて壁へと頭を良い音をさせて激突する。

『ぐ……』

頭を打って悶絶している姿を眺めながら

『起きてそうそうなにしてるの?』

頭と体の痛みに耐えながら身を起こす

『そっちこそいったい何を……』

『ん?私?シロウがそろそろ起きそうだったから、起こしに来てあげただけど、まさかここまでビックリされるとは思わなかったわ。』

『あ、ごめん。』

『まあいいわ、その様子なら怪我也殆ど癒えてるみたいだしね。』

そう言われて一気に記憶が戻ってくる。

『つつ・・・！！！！いたいどうなった？怪我は無いのか？遠坂は？それにあの黒い奴は？』

かなり混乱した様子で問い詰めてくる士郎に対して

『落ち着きなさい、順番に答えるから。まずどうなったかかっていう質問だけど、あのあと、アサシンと思われる奴を追い返してから家に戻ってシロウの治療。それでシロウが起きるまでこっちも休んだりして、今に至るってわけ。』

そこで一息つくと

『次だけど怪我はバーサーカーにやられた傷以外は大丈夫。リンは自分の荷物を取りに家まで戻ってるわ。リンに感謝しておきなさい。傷の手当てと看病もしてくれたんだから。本人は否定するだろうけど・・・ね。』

『そうか・・・怪我が無くて本当に良かった。それと・・・迷惑をかけて本当にすまなかった。』

その自身よりも他者を心配する様子を見て

(正義の味方が・・・。)

『そう言えば今何時だ？随分寝ていたような気がするんだが。』

『ふふ、あれから一日経ってるわよ。もうすぐ午後四時ってところね。』

『え・・・？』

そう言うとポカンとした顔でこちらを見るシロウ

『おかしくは無いでしょ。あれだけの怪我をしたんだから。さて、もう少し横になってなさい。今から夕食を作ってくるから、冷蔵庫の物は勝手に使わせてもらおうよ。』

立ち上がって台所へと行くところを慌てて呼び止める

『いや、俺がやる。そもそもフェイカー料理出来るのか？』

『私？まあ、それなりにね。生前は色々と転々してたから。ってほら良いからさっさと寝る。』

『う、解った。』

そう言うとおとなしく横になる。

『よろしい。じゃあまた後で。』

そう言うと台所へと去って行った。

『・・・頭が痛い。』

横になり、目を閉じる。

『シロウ、起きなさいシロウ。』

柔らかな声に次第に目が覚める

『ん・・・。。』

そんな姿を見て

『ようやく起きたわね。もう少し寝かせておいてあげたいけど、お粥は温かいうちに食べた方が良くから。ほら、食べなさい。温まるわよ。』

そう言つと土鍋に入つたお粥を目の前に差し出してくる。

『あ、ありがとう。』

確かに丸一日寝ていた為か、非常にお腹が空いている。礼を言つて蓋を開けると、そこは一般的な白いお粥の上に梅干しと塩昆布が添えてある。

『これは旨そうだな。それじゃあ、いただきます。』

そう言つて熱熱のお粥を一口、口に含む

『!・・・旨い。』

その一言を聞いて顔をほころばせるフェイカー

『よかつた、結構久しぶりに料理したから、腕が錆ついていないか少し心配だつただけど、大丈夫そうね。』

『いや、全然そんな事ないぞ、ご飯も丁寧に炊いてあるし。・・・それにこの味は何か隠し味があるのか?』

『流石。隠し味に気がつくなんてね。乾燥貝柱があつたから使わせてもらったわ。昔、仕事先の事務所で作つてるのを教えてもらったの。』

『成程、確かにほんのりと優しい味がする。』

しばらく無言で食事が進み

『ふう。ごちそうさまでした。』

言いながら手を合わせる

『お粗末さまでした。あ、食器はこっちに渡して、洗って来るから。シロウは少し食休みしてなさい。もう少し休んだら外に行くわよ。』

そう言うと食器を持って台所に行くところ

『外に?』

『ええ。何か山のお寺から、異質な感じがするのよ。あの寺はキャスターの根城だし、様子を見ておいた方がよさそうだし、それに・あのアサシンも気になるし。』

『寺?それって柳洞寺の事か?』

『ええ、そうよ。どうかした?』

そう言うと士郎の顔色が悪くなる

『そんな、だってあの寺には、一成や寺の人達が居る筈なのに。』

『多分、魔術か何か使っているんでしょうね。イツセイって友達?多分無事だと思うわ。キャスターとしても殺したりして注目を浴びるのは不味いでしょうし。』

『そうか……。ん?でもどうしてキャスターが柳洞寺に居ることがわかったんだ?』

『少し・・ね。私は魔力について、結構敏感と言っか詳しいという

か。もう少ししたら教えてあげる。』

出て行く直前に

『一つだけ言っておくけど、魔術は使わないように。多分使いたくても使えないだろうけど。』

『な!』

慌てて意識を集中して体内でスイッチのイメージをしようとするが
『つつ!なんだこの違和感、トリガーがある?』

『シロウが寝ている間に、魔術回路を生成してあげたの。でも結構強引だったから回路の生成と維持調整で暫く魔術は使えないわよ。下手に抗う力があると戦闘に飛び出しかねないし。でもシロウならためらわずやりそうだけど。』

そう言って、意地悪く微笑む。

『魔術回路の生成?』

『そう、シロウは魔術を使うたびいちいち回路を作ってたでしょ。あれだと効率も悪いし危険だから。』

(成程。・・・ん?)

『何でフェイカーはそんな事知ってるんだ。俺はそんな事まで話した覚えがないんだが。』

そう指摘すると

『・・・・・・・・私とシロウは特別なの。時が来れば全てを明かすわ。』

今は私の言う事を信じて。』

(そう、特別なよ。)

『………解った。俺はフェイカーを信じるよ。』

『ありがとう。じゃあ、また後で。』

そう言って出て行った

一人なつた部屋で

『特別……フェイカーか。』

そう呟いた。

同時刻

冬木の町並みを見下ろす柳洞寺、その境内に異変が起きた。空間が軋み悲鳴を上げ、こじ開けられ、本来存在しない筈の異物が姿を現

した

ひとりは青を基調とした和服のかわいらしい女性で狐耳に尻尾が生えている

『いたたた、まったく聖杯め、もう少し優しく飛ばしてくれても良いでしょうに。マジむかつく。ってご主人様！ご主人様は何処ですか！』

何所かの高校の制服の服を着た男性が少し離れた地点にいた

『大丈夫だ。キャスター。』

声に反応し抱きつく

『うわーん。ご主人様大丈夫でしたか。なにぶん荒い転移だったもので、もしご主人様に怪我があつたら聖杯を真剣^{マジ}でぶち殺す所でした。』

『大丈夫だから、落ち着いて。』

そう言いながらキャスターの頭をなでながら周りを観察する

『ここは、寺か？』
そう呟くと

『その通りよ。ここは柳洞寺。そして、私の神殿に穴を開けて土足で乗り込んできた異物は何処の馬の骨かしら？』

まるで影から染み出るように一人のローブ姿の女性が現れた

素早くキャスターが警戒態勢を取る

『これは、これは失礼いたしました。で貴女、なにか用？』

『なにか用？とは傑作ね。人の家に土足で上がりこんでイチャイチャしている小娘が。』

『別に私とご主人様が何処でイチャイチャしようが勝手です。・・・ははーん、さては貴女うらやましいんでしょう。』

ローブ姿の女性が動揺して

『な！言つに聞かせてこの小娘！私だってイチャイチャする相手ぐらい・・・』

段々と声が小さくなっていく

その様子を見て

『ああ、ごめんなさいね。貴女のような年増を相手にする物好きは、居ませんか。』

その瞬間空気が凍る

『な・ん・で・す・てえええええええ！貴女だって人の事を言える立場じゃないくせに！』

『ふふん。私には全てを受け入れて愛してくださるご主人様がいるから別にどうってことないですよーだ。』

『おい、キャスターあまり相手を刺激しないように・・・』

瞬間

『ふふふ、あはははははは。殺す。』

そう言つて空へと飛び上がり魔力を集中させ始めた

『何処の異物か調べようかと思つたけど気が変わったわ。貴女達はここで死になさい!』

そして膨大の量の光弾が放たれる

それに対しキャスターは素早く反応し

『マスター、掴まって。』

マスターを抱え、光弾を避けていく

『ふん。化生がちよこまかちよこまかと
更に光弾の数が増える。』

『あらら、ちよつと刺激しすぎましたかね。見たところここは相手の神殿の中っぽいですし、少し相手をしたら一旦逃げましょう。状況収集が第一です。』

マスターはうなずき

『解つた。キャスター。』

『では行きますよ!』

『なにをこちゃこちゃと!』
敵が誘導弾を作りだし放ってくる

キャスターが符を取り出し後方から迫ってくる誘導弾にめがけ
『呪相・炎天』

放ち相殺し爆風を起こす

『それで隠れたつもり。甘い……?』

爆風の煙幕から現れたのは狐耳のマスターだけ

『何処に!?!』

『貰った!』

『つつ!』

キャスターは自分の武器である鏡を踏み台にして空中を駆け上がり

空の魔女までたどり着いた

『私に、空で接近戦を?馬鹿かしら?……天の怒りよ!』

叫ぶと同時に稲妻がキャスターめがけて落ちる

『ふ、馬鹿は貴女!』

キャスターに直撃する瞬間鏡が稲妻を反射、その隙に懐まで踏み込み

『こちら、接近馬鹿でとんでもない連中の中を勝ち残ってきたんです。マスターと絆の深さ思い知りなさい!』

拳に魔力を溜めて、おもいつきり魔女の腹を殴り飛ばした。

『がつ!』

血を吐きながら、落下していく、地面すれすれで体勢を立て直すと

『ぐ……逃げたわね。』

そこには誰も居なかった

『あの役立たず門番が止めるかしら？多分、無理ね。すぐに見つけて殺してやる。』

他に動く物の居ない境内でそう一人呟いた

イレギュラー（後書き）

どうでしたか。まさかのキャラでビックリされたかも知れませんが、前から予定にあった事なのでそこは勘弁してください。また、意見や感想があつたらぜひお願いします。それでは良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6857i/>

新たなる錬鉄の英雄の物語

2010年12月31日07時39分発行